

◇『溜まったガスに火をつける』

(株)毎日放送 常務取締役 木田洋一

萩生田文部科学相が、テレビ番組で「(英語民間試験は)自分の身の丈に合わせて頑張ってもらえば」というような発言をし、これが教育格差の容認ではないかと批判が集まり、謝罪、試験の導入自体の延期に追い込まれました。「身の丈」という上から目線の言葉だけで、なぜここまでの事態になったのか。政府が一旦決めたことをこんな直前になって止めざる得ないほどのことなのか。もちろん、大臣の辞任が相次いでいることなど政治的要因もあるとは思いますが、この一言でこれだけ批判を浴びるのは今回の試験改革について世間の不満、疑問が溜まっていたからだと思います。「身の丈」という配慮に欠いたことばは、大臣の資質の問題で、試験改革の問題ではないはずです。世間に不満が溜まっていなければ、本人の失言として問題にされるだけで、制度までひっくり返す大爆発を起こすはずがありません。

私は世間の不満、疑問などが溜まることをガスが溜まると言って表現します。ちょっとした火花で大爆発するような事案が時々ありますが、それは世間にガスが溜まっている場合だと思います。危機管理では、世間がどんな雰囲気かということを読み取らないとダメです。雰囲気を読めと言ったってどこに気を付けるのかと言われるでしょう。この件でいえば、7月にTOEICの撤退、8月に3割の大学が導入を決めていないと明らかになったことなど制度について不備、疑問のニュースがあった中でも、強行導入しようとしていることに、当事者の受験生でなくてもこれでいいの?という空気が世間にあったのは間違いないと思います。常にニュースだけではなく世間の反応に気を付けておくことが大事です。

失言は、やはり失敗ですから叩かれますが、それほど大騒ぎにならない時と、ここまで炎上するかという時があります。これは世間の雰囲気、コンディションによることが多いように思います。コンディションと言っても、不満や疑問だけではなくやっかみや閉塞感など様々な要素があります。それを読み解いておくために、世間へ向けてアンテナを常に向けておくことが大事だと思います。

◇『メディアに出ることが第一歩』

日本一明るい経済新聞 編集長 竹原信夫

あの会社はメディアでよく取り上げられるのに、うちはどこも取材に来てくれない。あの会社よりもっとおもしろいし、成長しているエエ会社やのに…。なんでやろか?と嘆かれる経営者さん多いです。

まあ、そのおもしろさにもよりますが、一番の問題はメディアの人に知られていないからです。まずはメディアの人に知ってもらわなければなりません。ここが一番のポイント。どうすれば、知ってもらえるか?メディアに出ることです。

なんか、わけわからない話のようですが、メディアの人も面白いネタを探しているのです。ボクが若い頃は、会議所や業界団体の事務局スタッフなど“人のネットワーク”を活用していました。でも、最近の記者は手取り早く“インターネット”でネタを探します。

ネットニュースなどの情報源は、メディアから集めています。メディアというと、ついついキー局テレビ、全国紙、有名雑誌とマスコミを思いがちです。でも、世の中には「日本一明るい経済新聞」のようなちっちゃいミニコミいっぱいあります。業界紙、専門誌、コミュニティペーパー、地域FM、ネットラジオ、ネットテレビなどなど。お金がかからないならどんどん出しましょう。記者のネタ探しに引かかる可能性が高まります。

ポイント

- ・まずは知ってもらう
- ・記者はネットでネタ探す
- ・ミニコミを大事に